



昭和43年1月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5ノ2
 井上重兵衛方 電話(321)1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電話(481)7445

狂言人語

あけましておめでとうございます。「狂言」も百号を越え、また一つ年を取りました。本年は狂言にも特に由縁の深い「申歳」です。一層の斯界の発展を期待して、また小紙を皆様のお手許に届けさせていたゞきます。

会別会、梅若六郎記念祝賀能など多催な催しが組まれております。熱田神宮への初詣でをすませ乍ら、是非能楽殿への初観能におたちより下さい。

一月三日 新年語始

謹賀新年 狂言共同社

昭和四十三年元旦

旧年は本紙「狂言」にとつても誠に意義深い年でした。特に本紙百号記念号の刊行に際して社中一同は四苦八苦一時は資金面での行き詰り等で流産に終るかど心配もしましたが、皆様の御厚意で何とか刊行致すことが出来ました。これを一つの足跡として本年も号を重ねて行けることを社中一同深く感謝致すと共に、年頭に当りあらためてフアイトを燃す次第です。どうか本年もよろしくお願い致します。

年々盛んになりつゝある能界、本年も年頭より道成寺を中心に据えた清韻

一月六日 学生能と狂言の会	能 小袖曾我	小寺 雅子	藤田 和子
	能 小野 好子	杉山 かね子	鹿野 恭子
	能 葛 城	小室 敏子	高安 滋郎
	能 女郎花	北村 成子	西村 欽也
	能 武 悪	伊藤紀美子	伊奈 允就
	能 骨 皮	黒田 展子	舟橋 俊美
		吉田 耕造	伊奈 俊美
一月十四日 観世会		日下部康生	岩崎 正夫
		平松 昌彦	渡辺 郁夫

一月十五日 清韻会	能 餅 酒	井上松次郎	河村 丘造
	能 餅 酒	井上松次郎	河村 丘造
	能 餅 酒	井上松次郎	河村 丘造
	能 餅 酒	井上松次郎	河村 丘造
	能 餅 酒	井上松次郎	河村 丘造

一月廿一日 宝生会	能 田 村	内藤 泰二	西村 欽也
	能 田 村	内藤 泰二	西村 欽也
	能 田 村	内藤 泰二	西村 欽也
	能 田 村	内藤 泰二	西村 欽也
	能 田 村	内藤 泰二	西村 欽也

一月廿八日 梅若六郎祝賀能	能 素袍落	井上礼之助	佐藤 秀雄
	能 素袍落	井上礼之助	佐藤 秀雄
	能 素袍落	井上礼之助	佐藤 秀雄
	能 素袍落	井上礼之助	佐藤 秀雄
	能 素袍落	井上礼之助	佐藤 秀雄

狂言解説

武悪||不奉公者の武悪に勘忍袋の緒が切れた主、今日は自身の太刀をはずけて太郎冠者に切らせにやりました。所が主命とは云え永年の同輩を冠者は何としても切れません。そこで逃がしてやつたのですが……前年の三者の人間関係、人情の機微と後半の以外な結末、狂言の持つ深い味わいを学生

の熱演でござん下さい。
 餅酒||上頭へ年頭の貢物を納めるため上り合せた二人の百姓、御前出され難題にも無事答え、万難公事をも許されて目出度く舞い納めてそれらの国へ帰つて行きます。代表的百姓狂言の典型ですが、年頭にふさわしい目出度いものです。
 貫舞||あまりの酒呑み亭主に不図したはずみに口論となり、妻は里に帰つてしまいます。酔からさめた夫は里へ妻を連れ戻しに行くのですが舅はがんとして聞き入れません。二人の口論の末取っ組み合いとなつて……。夫婦、家庭のあたたかさ妻の夫、子(金法師)への思いやりが観る者をほのぼのと包んでくれます。
 素袍落||伊勢参宮を思い立つた主、叔父のもとへ冠者を誘いの使いにやりましたがあまり急なこと、叔父は参宮には行けぬと冠者を振舞い、素袍を与えて代参を頼みます。酔い気げんで戻る途中、主と出くわし……。
 腰祈||無事修行もおえた山伏、久方振り山を下り、百歳に余る祖父をたずねます。腰の曲つて不自由そうな祖父の腰を伸ばさんと、さつそくおぼえた祈りを披露するのですが……。
 ※骨皮||なまぐさ坊主と新発意。坊主は客のあしらい方をこま／＼と新発意に教えるのですが、融通のきかぬ新発意は、この度毎にとんでもない失敗をしてかしてしまいます。怒る坊主と坊主のなまぐさをスツパ抜いてケロリとしている新発意。笑い話や落語などではしばしば取扱われます。

狂言同異

野村 広二

新年おめでとうございます。今年も能楽界が佳い年でありますよう、年の始めに、まづ皆様とともに祈りたいとおもいます。

四十二年の年も、大小の行事をとりまぜて、何かと多彩な年でした。名古屋をはじめ東西の各地で、いくつかの話題を残す演能がおこなわれましたことは例年のとおりです。次に、日本能楽会の会員にあたらしく三十七名が加えられました。そのうちに名古屋から五名の楽師が選ばれ、八名の重要無形文化財指定保持者を数えることになりましたのは、名古屋能楽界の充実を如実に物語るもので、能、狂言の正しい伝統を守つて、多難な明治、大正、昭和の三代をただ一途に歩んできた精進と労苦が、今年こそむくわれたことと慶賀にたえません。もちろんこれまでにきづきあげた物故者、先輩各位の努力があつたことは申すまでもないことです。狂言方から野村万蔵氏が人間国宝になられたことも特筆大書すべきです。また桜間道雄氏の芸術祭賞受賞の発表も欣快事でした。しかも受賞対象曲が「道成寺」であることは印象深いものです。きけば、鐘入りは、シテが鐘の下に入つて構えると、するするとおけるといふ演出企画。これは故三宅襲氏から承つていただけに、筆者もぜひ一見したかつた「道成寺」でした。それにめまぐるしいほどあたらしい道をきりひらく能、狂言関係の研究発表に

まじつて、大著、力作がでたことも忘れてはなりません。「古狂言台本の發達に關しての書誌的研究」(池田広司)「世阿弥研究」(西一祥)「沼艸雨能評集」(沼艸雨)などがそれです。昨年の「私にとつて中世的なもの」につづいて高木市之助老博士が発表された「謡曲の軍体」(国文学三月、中世文学にあらわれた英雄像特集号)も教えられるところ、味わいの深い一文です。小品にも、それにおとらず傾聴に値する文章に数多く接することができました。黒川能の十一月上京も話題の一つといえるでしょう。他方、今年の海外演能旅行も記録しておかねばならない一事です。

さて、名古屋ではやはり昨年につけなない狂言や能の会をもつことができました。「翁」は二回(内藤泰一、久田秀雄)演ぜられ、したがつて、三番叟も二度、井上松次郎氏と佐藤友彦君がつとめました。そして、河村丘造、佐藤卯三郎両氏をいただき、井上松次郎氏を中心に、名古屋の狂言方(狂言共同社)がいよいよ充実をみせて、朝日狂言会、名古屋和泉会やるまい会に巾の広い狂言の味をかもし出したことにはもろ手をあげて喜びたいとおもいます。新進の活躍もうれしいことです。日頃の修練の賜物といえましよう。

「節分」(松、祐一「蝸牛」(又、松卯)「孫聲」(卯、松、友彦、義次)に小舞「宇治ノ圃」(河村丘造)「奈須之語」(礼之助)ほか二十曲に余る佳篇を拾うことができます。野村万蔵、三宅藤九郎、茂山千作諸氏の長老に東京、關東から幾人かのみなれた上手が

来名し、そのわざにたんのうさせてくれたことも書き添えねばなりません。「猿座頭」(千作ほか)「川上」(万蔵)「宗論」(万、保之、丘造)などをあげることができます。共同社の「煎物」(保之、右近、松ほか)「弓矢太郎」(松、礼ほか)の発表も見事。「宗論」と「佐渡狐」に名古屋と東京の比較ができたのも興味があります。おだやかでやさしく、力強く格調高い、冷めたくておかしき狂言の多面体に愛好家はさぞかし満足されたこととでしょう。能の方では、三十五番以上の佳作があつたはずで、今年もそのうち十五番はみおとしています。

「楊貴妃」(恋重荷)「鏡之丞」(屋島)「石橋」(喜之と武雄)「松風」(六郎)「賀茂」(花筐)「元正」(清経)「元昭」(綾鼓)「松風」(英雄)「小鍛冶」(前、欣三、後、本田光洋)「田村」(松風)「巖」(黒塚)「今井幾三郎」(土蜘蛛)「豊嶋三千春」などは記憶にのこります。猶義氏の三番に「鞍馬天狗」(元昭と英雄)「景清」(九郎と桜間道雄)をみのがしたのは残念でなりません。このうち豊嶋三千春、本田光洋両君の進歩には大きな期待を寄せたいとおもいます。しかし老女物が一番もなかつたのはさびしい限りでした。日本能楽会、中日五流能、名匠鑑賞能、狂言の三つの会に加えて、熱田祭奉納能、夏の市民夜能、これは「薪」の演出にぜひ一考を希望したいとおもいますが、それに朝日大衆能や学生の能と狂言の会がおこなわれて、能楽の啓蒙、若い人達の真摯(しんし)な研究熱の盛んな

賀正

ふじや

河文

電話代表 一三八一

トヨダビル店

大名古屋ビル店

とてな

船津屋

電話桑名代表 一八八〇番

名古屋であることも特筆できることである。この「狂言」が百号を迎えた四十二年であり、「能楽の友」を楽師たち(有志)が発刊したこともあわせて書き添えたい。放送は、昨年末をあげる、「日本文化の特質」(能の独自性にふれる、石田英一郎、吉川幸次郎)「日本音楽の道しるべ」道成寺もの(岸辺成雄、横道万里雄)「舟弁慶」(鏡)など。本では「わが中世」(第四章謡曲と禅思想、寺田透、佳篇)「わが先祖—観阿弥との出会い」(鹿島守之助、中日一〇、五)、これに関連して「東光太平記」(楠正成と大和四座のくだり、今東光、産経連載小説七月下旬の数日)「能」(日本の伝統第二巻、R、マツキンノン、中村保雄)「黒川能」(朝日ジャーナル、一一、二四号)ほか。

猿の年

西村弘敬

近來年毎に干支(えと)を色々の事に使われる様になりました。干支とは十干十二支の事で、十干とは「木火土金水」の五行(ごぎょう)の読み方を「きひつかみ」と読み且つ之れに「兄弟」(えと)をつけて「きのえ、きの

と、ハ、え、ひのと、つちのえ、…」など十種の読み方とし文字は「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」に割当てて用いて居る。又十二支とは「子丑寅卯辰巳…」(しちゆういんぼう…)という十二文字を動物の名に読みかえ「ね、うしとら、う、…」などとし前の十干と合わせて「きのえね」又は「ひのえうま」などという風に用いられて居る。今年は「戌申」で(つちのえさる)でありますので世間では猿の字に因んで、色々絵画彫刻おもちゃなどに使われることでしょう。

謡や能の方には直接に猿を扱った曲はありませんが、謡の文章の中には猿という文字の出で来るのも少々あります。例をあげれば

花籠の(狂いの中)に「水の月を望む猿の」

大原御幸の(初同中)「梢の嵐猿の声」

蟬丸(クセの中) 峯に木伝う猿の声

張良(ワキ一声ノ中) 「五夜の哀猿月に叫ぶ」

草紙洗ワキシテ問答の中「御身は猿丸大夫の流れ」

全 「夫れは猿猴の名を以て」

などがあります。また外にもあるかも知れぬと思いついたものだけあげました。

狂言の方には猿其物を取扱ったものがあります。鞆猿(うづぼざる)、猿舞(ざるむし)、猿座頭(ざるざとう)などであります。鞆猿は或る大名が道に猿廻しの芸人を見かけ、猿の毛皮を鞆掛(うづぼがけ)に致したいから猿を呉れと云うのを猿引きは承知しない

ので、大名が立腹し、矢にかけても取るや云い張るので猿引きも致し方なく悲しみながら猿に因果を含めて言い聞かせて居るのに、無心の猿は今將に自分の命の終るのを見ず、教えられたる芸をして居るのを見て猿引きは到底殺すに忍びず、たとえ自分もろとも殺されようとも猿は殺す事出来ぬと歎き悲しむのを見て、大名も遂に同情心を起し猿を取る事を思いとどまる事になったので、猿引きは大きに喜んで猿に礼をさせたり又悦びの舞をまわせたりするので、大名も機嫌を直し色々の引出物を与えて帰すという誠に心温まる筋合で、後味の至極よろしい狂言である。

猿舞というのは嵐山の能の中入に替の間狂言として演ずることもあるもので、若い猿が舞に行くのを人間の真似(まね)で舞入する有様を作った狂言で、舞の親猿が家来の猿共に酒肴などを荷かせて養家へ行く、養家では男猿が出迎え、賑かに酒宴を催し男と舞とが相舞を舞い目出度祝言するといふもので、之れは実際にはあり得ない事ながら何となく朗らかさのある狂言であります。

猿座頭というのは或る座頭(盲人)が女房を連れて花見に行き、花の下で酒宴をして居る処へ、猿引きが来て座頭の女房と猿とをすりかえて、後に座頭だけ残して逃げて行った。座頭は女房が居ぬの気がつき大騒ぎをするので猿があはれ出し、座頭は猿に追いまくられて逃げ帰るといふ少々あくどい筋合の狂言であります。

強剛者伝 — 丘造昔話より

門水の巻(その二)

ともかく門水というのは愉快な男で、どんな場面に出逢ってもそれをエピソードに演出してしまうような男だった。これももうとうの昔に時効にかゝっているから公開するのだが、或る時例によって門水先生、通いなれた色街へ出掛けたわけだ。或る置屋に上り込んで居ると、そこへ何も知らずにのこ／＼やって来たのが若し井上鉄次郎、御当人まさか門水が居るともしらず、鼻の下を長くしていい気になっている。門水の方も初めはギョツとじたわけだが、相手も気がつかぬ様子なので知らぬふりをしていた。そのまゝで終れば何の話にもならないんだが、そこが門水だ。持ち前の悪戯心がむく／＼と頭を打たれて来る。とう／＼と鉄次郎の部屋の前までのこ／＼様子を見に出掛けた。中では鉄次郎、鼻の下をます／＼長くして若い芸人ではんを食べさせてもらっている。そこで門水、部屋の障紙をそおと開け、あのふざけた顔をつき出して「バァ」とやると同時にボタンと障子を閉じ、そのまゝ逃げ帰った。いやあ、鉄次郎驚いたろうなあ。門水先生、中で鉄次郎のあわて振りを想像して、ひとりや／＼しながら帰ったことだ。

この門水の手ほどきでその道の達人となったのも多かったほどだ。これもつい先頃故人となったので名前を挙げてよいが、山本某としておこう。この男の若年の頃あまりにもまじめすぎた。そこで親爺が「たしが市の教

狂言

狂言人語

寒い日が続きます。それでも二月、各地の梅便りが聞かれると、何かほつとす様な暖かさが感ぜられるものです。憂うべくは国際情勢、外国の船艦をはさんで日本人同志が憎み合い、血を流す此頃です。ベトナムの空に、朝鮮の海にくり返されんとする悲劇が一刻も早く終る様、同じ人間として平和を願つてやみません。

明治百年、永い伝統をこの期に再び見つめんと、いよ／＼斯界の発展がうかがわれる年ですが、一方海外に於る能狂言のブームとも云われるほどの盛んな公演成功はしば／＼日本人の方が驚ろかされる位です。二月初めには又野村万之丞、万作、野村又三郎氏等の和泉流狂言公演団が渡米します。

ひとしきりその反響がうかゞわれることですが、丁度此程、かねて滞米中のI氏より、彼地の盛んな模様を報せる便りが共同社宛に届きました。大いにその成功を祈ると共に、私達日本人もこの伝統芸能を世界に誇るべく、より一層国内に於る充実と発展をあらためて自らに課さなければならぬでしょう。

二月の催能

二月四日	梅猶会	能松 風	梅若 盛義	西村 欽也
		能天 鼓	梅若 猶義	高安 滋郎
		能 間	井上松次郎	
二月十一日	榎雲会	狂 間 昆布壳	佐藤 友彦	井上礼之助
		能 鶴 亀	植村 本子	西村 弘敬
		能 経 政	小川 道子	西村 欽也
		能 熊 野	葛原 正枝	高安 滋郎
		狂 鬼 瓦	寺西 智恵	井上礼之助
二月十八日	童泉会	能 狸 々	中原 真澄	高安 勝久
		半能 井 筒	鈴木 公子	高安 滋郎
		半能 絵 馬	泉 嘉夫	西村 欽也
		狂 清 水	伊藤 滋敏	井上松次郎
二月廿五日	たなびき会	狂 清 水	井上礼之助	井上松次郎

狂言解説

昆布壳例の強がりばかりで空つきし意気地のない大名。今日も北野詣でに行くとして昆布壳の行商人に太刀を嚇し持たせたのですが……太刀が重要な役割を果たします。

昭和43年2月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町6/2
井上重兵衛方 電(321)1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(81)7445

狂言花野

野村 広二

鬼瓦永々在京する大名。目出たく訴訟にも勝つて本国へ下ることになりませんが、御礼参りに因幡堂へ出かけました。ふと見上げた屋根に鎮座する鬼瓦を見つけた大名……。ほの／＼とした人間性を感じさせる狂言です。

清水野中の清水へ大事の水桶をあげて冠者に水を汲む様云いつけました所が横着者の冠者は行きたくないとして鬼が出たと逃げ帰ります。主が見に出てけると冠者は鬼に化けて日頃の憂さをはらすのですか……。

一月から能界はにぎやかである。十五日、熱田へいく。咲き出しているはづの椿の花をさがしてから、能楽堂に入る。「道成寺」(大槻文蔵)と「貫掣」(又、松、祐一)をみた。二十一日「西行楼」(京都、金剛殿)と「鈍太郎」(京都、千作ほか)もみた。「貫掣」と「西行楼」のことは別記するとして、「道成寺」については、まづ、主役のシテはじめ、三役、地謡、鐘後見まで笛の藤田昭彦少年を最年少に、実に若い人たちの登場が目立ち、その見事な力の総和のうえに演ぜられた。それをひきしめるように、間狂言の先輩二人(卯、秀雄)がおちついて前後をつないでいた。しかしシテの進め方は道理と説明が先行し、それをふつくとおおう何物かが、特に前シテに欠けていたし、カタチのよさ、あやしきはあつ

サンフランシスコ便り

Y・I 生

(かねてより滞米中の某氏より共同社宛に、彼地の能狂言の公演、活躍を報せる便りが届きました。御紹介させていただきます。)

でも、あやしい美しさが無いのはどうしたことであろう。後は地味に活躍するワキ(西村欽也)の芸と陰々滅々のふんい気をつくり出し、少し弱い気がした。こういう道成寺も、長い上演史からは一つの記録になるうが、もつとわざをこえる心の底がみせてほしい。

来名の観世元昭、本田光洋、豊嶋三千春、長田曉諸君に肩をならべて将来ある文蔵君の自重を祈つてやみません。正月の放送は、今年の「翁」は喜多流(美)。一調一声「玉葛」(六郎、幸祥光)もあれば、連吟「求塚」(弥一、謙三)もあつた。狂言は「鍋八撥」(忠一郎)に「八幡の前」(千五郎、以上ラジオ)、「松樫」(万蔵)に「舟渡掣」(千作、忠三郎)、「棒縛」(千之丞)と能の「橋弁慶」(英雄)、「安宅」(金剛殿)、「黒川能、三番叟、河水」(テレビ、いづれもNHK)などよくきき、よくみた。本は、「産経能の意義」(沼州雨、随筆サンケイ三月)、「観阿弥作能考」(金井清光、国語国文学一月、未見)など。

今年申年、申楽談義にもゆかりのある申年。二月も一月におとらずよい狂言と能をみたいものです。

共同社の皆様お元気ですか。先日は狂言百号特集号を頂きました。百号まで続けられた企画には、古川先生のおめでとうという言葉がびつたりすると思います。心から祝福申し上げます。今後も種々の苦勞があると思いますが、共同社の美徳とする一致団結と、彦様の偉業を受継いだ若年連の才能を以て末永く「狂言」号は続くと思致します。同時に内容の向上に努力され、有益な資料とされんことを祈ります。

去る十二月八日に当地で狂言講演会がありました。サンフランシスコは有数の国際都市で、有名なチャイナタウンを始め近く日本人街に出来る日本文化センターなど各国風俗が多く見られ、私共も異国に居る感じがしない程ですが、かゝる環境にあつて国際的文化活動も盛んであり、東洋美術紹介に活躍している東洋美術協会と日本協会が主催で、ワシントン大学、東洋美術センター、マツキンソン博士を講師として招き今回の講演会が開催され、映画釣狐が上演されました。

第一に私が関心を持ったのは、かゝる講演会にどれ程の人が集まるかという点でした。というのは本年開催された能上演(宝生流一行公演)では当日券が簡単に買えると思つて出かけたのですが、大変な観客が集まり券の買えない人が残念そうに帰る姿が数多く見られました。私もあふれ組の一人でしたが、受付に知人を見出し立見で何とか見せて貰いました。私の認識不足かもしれないが、国際都市とは云えかゝる意外ともいふべき事実があつたため何となくこの点に関心を持ったわけ

です。結果は観客数約五百五人、その内日本人と思われる人が十七人、女性が二十九人、若い感じの人が二十一人でした。能公演とは比較にならない動員数でしたが、これは講演会という性格とか場所的な条件とかで比較することと事体が無理かもしれせん。とはいふものの金曜日の夜八時半より夜十一時半までの間、熱心に集つた人達の姿には心暖まる感じでした。

最初にマツキンソン博士が紹介された日本生まれられたこと、日本語は流暢なること、野村万之丞氏の弟子であることなど。案内状では狂言は古典喜劇舞踏劇 (CLASSICAL COMIC DANCE DRAMA) として紹介されています。語学力不足の私には講演内容を充分説明する資格がありませんがマツキンソン博士はまず狂言に流れるヒューマニティを説明され、后刻上演された釣狐の内容をかゝる観点から刻明に解説されました。

釣狐を映画上演番組として撰択されたのは大たんな企画と思ひますが、狂言を正しく紹介するという博士の気持が講演から読み取られ、博士の態度に敬服した次第です。映画の演者は、万之丞氏の狐、万蔵氏の釣手、後見に又三郎氏、万作氏でした。何時だつたか忘れましたが万蔵氏一行渡米以来の観劇であり、久しぶりに映画釣狐を楽しみました。

今回の講演は上記四氏の二月一日よりシアトル地区を皮切りに六週間各地を訪問されるための予備知識を与えるもので、当地では一行の公演は二月十五、十六日となつています。先日切抜きを送りましたがフォーチコーン誌に「何故日本の成長は違ふのか」という記事がそこそこで人間国宝が紹介され

ており万蔵氏の写真が出ています。四氏の訪米は秀れたフォーチコーン誌の分析を真実の姿で裏付けするものと期待されます。良き文化の輸出は大いに歓迎であり来る二月には観客席より大いなる拍手を送りたいと楽しみにしています。

皆様御自愛の程を。

三月の予告

三月三日 九阜会
能 田村 森川みどり 西村 欽也
能 鶴 植村真太郎 高安 滋郎
能 舟ふな 佐藤卯三郎 井上礼之助
三月十日 青陽会
能 土車 観世 元照 高安 滋郎
能 葛城 塚本 秀雄 西村 欽也
能 舟弁慶 柴田 収武 高安 滋郎
能 音曲舞 井上礼之助 佐藤卯三郎
能 加茂 辰巳 孝 高安 滋郎
三月十七日 名匠鑑賞会
能 高野物狂 宝生英雄 松本 謙三
能 土 野口 緑久 松本 謙三
能 鬼ヶ宿 茂山 千作 茂山千五郎
三月廿日 藤田六郎兵衛遷曆祝賀
能 巖 藤田六郎兵衛 齋子会
三月廿四日 中日五流能
三月卅一日 邦謡会
能 小 督 原 正義 西村 欽也
能 花 争 佐藤 友彦 井上礼之助
能 乱 梅田 邦久 高安 滋郎
片山慶次郎

重要無形文化財
中日五流能
昭和四十三年三月二十四日(日)
於 名古屋・栄東 中日劇場
第一部(午前十時開演)
金春榮治郎
通 高安 滋郎 山本敬一郎 小寺 金七
高木 敏郎 藤田六郎兵衛
熊 坂 観世 元昭 野村 万作
千 鳥 野村 万作
近藤 乾三
隅田川 宝生 弥一 谷口喜代三 野口伝之輔
大倉長十郎
加 茂 金春 欣三
富士太鼓 坂井音次郎
鉄 輪 辰巳 孝
観世 喜之
鞍馬天狗 福王茂十郎 安福 春雄 柿本 豊次
北村 一郎 藤田大五郎
白頭・素羽
後藤 得三
八 島 宝生 弥一 山本敬一郎 藤田六郎兵衛
田鍋惣太郎
弓流・那須之語
放下僧 柴田初太郎
東 北 山田仁三郎
殺生石 浅見 重弘
花 月 福岡 周齊
梅若 鶴義
若 福王茂十郎 安福 春雄 柿本 豊次
北村 一郎 藤田大五郎
恋之舞
晋 宗 論 茂山 千作 茂山千五郎
金剛 巖
高安 滋郎 谷口喜代三 小寺 金七
大倉長十郎 野口伝之輔
附祝言
主催 中日新聞
後援 文部省・文化財保護委員会
入場料 二千円、千五百円、千円、五百円
(全部指定席)
取扱所 出演能楽師宅、名古屋市内各プレイガイド、中日新聞、東京新聞、北陸中日新聞、各地本支社

狂言

狂言

昭和48年3月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5/2
 井上重兵衛方 電(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電 481/7445

狂言人語

暖かくなりました。一年中で一番楽しい季節です。永かった冬の間を待ちこがれた春、若葉の芽が銀色にふくらみ、花のつぼみが大きくふくらみ、柔らかな春の陽射しにふるえています。熱田神宮の神苑、能楽殿に通う木立りに囲まれた廻り、なんと楽しい小道でしょう。ついで遠廻りをし、道草し本殿に礼拝して、玉砂利をふみしめて見たくなります。やがて神宮の森は桜の花に囲まれるでしょう。鼓の音までが春を歌歌する様にうららかな春の空気に溶け込んで行くようです。

さて今日は恒例の中日五流能です。五流の名人が一堂に会し、名演を競ってくれます。愛好者には絶対に見のせませせん。狂言の方でも和泉流野村万蔵氏、大藏流茂山千作氏と両流の名人芸が見られるのは楽しみです。もう一つ狂言の楽しみは、名匠鑑賞能で大蔵、茂山家の稀曲「鬼ヶ宿」が見られることです。さほど大曲というわけではありませんが「花子」に準ずる習い物であり、なにせ伊井大老のお墨付きの曲であつて当地ではもちろん初演です。この機会に是非見ておきた

いものでしょう。

所で春末だきの二月半頃、静岡県の南アルプスの山すそに拡がる水窪町の西浦田楽を見学に社中より三人行つて参りました。紙面の都合で見聞記は四月号に掲載の予定ですが、雪深い山村に伝わる神の行事、夜つ引て行われる村民の祭り、学術的興味は別としてもそれだけでも十分に我々を魅きつけるものがあつたはずで、報告をお待ち下さい。

三月の催能

三月三日	九草会	能田村	森川みどり	西村	欽也
三月十日	青陽会	能鶴	植村真太郎	高安	滋郎
三月十日	観世	能舟ふな	井上松次郎	井上礼之助	
三月十日	元昭	能土車	佐藤秀雄	高安	滋郎
三月十日	秀雄	能葛城	佐藤秀雄	西村	欽也
三月十日	西村	能舟弁慶	塚本秀雄	高安	滋郎
三月十日	高安	能舟弁慶	井上祐一	井上礼之助	
三月十日	高安	能舟弁慶	柴田収武	井上松次郎	
三月十日	高安	能舟弁慶	井上礼之助	井上松次郎	
三月十七日	名匠鑑賞能	能加音曲	佐藤友彦	井上松次郎	
三月十七日	名匠鑑賞能	能加音曲	佐藤友彦	井上松次郎	
三月十七日	名匠鑑賞能	能加音曲	佐藤友彦	井上松次郎	

能高野物狂	宝生 英雄	松本 謙三
能土間	茂山千之丞	松本 謙三
能鬼ヶ宿	野口 禄久	松本 謙三
三月廿四日	茂山千五郎	茂山千五郎
三月廿四日	藤田六郎	藤田六郎
第一部	午後十時始	於 中日劇場
能蛾	金春栄治郎	高安 滋郎
能隅田川	近藤 乾三	宝生 弥一
能鞍馬天狗	観世 喜之	福主茂十郎
能千鳥	井上松次郎	佐藤卯三郎
能八鳥	野村 万蔵	野村又三郎
能八鳥	後藤 得三	宝生 弥一
能杜若	茂山千五郎	福主茂十郎
能郎	梅若 猶藏	高安 滋郎
能宗論	佐藤 秀雄	高安 滋郎
能小督	茂山千五郎	茂山 真吾
能花争	佐藤 友彦	西村 欽也
能乱	梅田 邦久	井上礼之助
	片山慶次郎	高安 滋郎

狂言解説

舟ふな例によつて西の宮へ遊山に出かけた主従、途中神崎の渡で渡し船を呼ばんとて冠者は大声で「ホイ、フナヤイ」とやらかします。主があらはふねじやと云うてもきません。遂には古歌をひいての口論になります。音曲舞吉日に舅の方へ舞入りせんと晴れ姿を整えた舞。所が舞入り作法を知らず、知人は後の笑い草にとんと

でもない作法を教えたので……。宿ヶ鬼大藏流千五郎家のみに伝わる狂言です。確か井伊大老が自から創作したとの話ですが、能の安達原の伝説に狂言花子の構成とをうまくとり入れたものです。む論名古屋では初めての、興味深い狂言です。

千鳥は貧乏大名に仕える才覚者の冠者今日も酒代のたまつた酒屋へ酒の工面に行きます。しるる酒屋の主人をだましつ、浮かしつ、遂に首尾よく酒樽をせしめるまで、人間国宝万蔵氏の芸をたつぷり味わい下さい。

宗論は道運れになつた浄土僧と法華僧互いに自分の宗旨こそ真の道と宗論が始まります。南無阿弥陀仏と南無妙法蓮華経、浄土が踊り念仏で浮かれると法華も負けじと踊り始め……。千作、千五郎親子の息の合った芸が見ものでしょう。

花争は昔から「花は桜木」とやら申しますが、理屈っぽい冠者には通じません。「花見」と「桜見」でまたぞろ主従に口論が始まりました。例によつて古歌の引用、冠者は乏しい知識で大いに奮闘するのですが……。

狂言花野

野村 広二

二月十八日の日曜日。おだやかな日である。沼津雨氏のおたよりに産経観世能と金剛定期能(二月)の招待をうける。こたつに入り、満開の黄梅の鉢を前に封を切つた。さて、一月末から齒の手術でK病院に入る。その病中日誌の一こま。節分、立春も病院です。節分の日、十八日とちがって、まだ冷めたい日であつたが、病室の窓

越しの風景はおだやかに見えた。退院も間近なこの一日、名古屋城を何回も眺めては、どのあたりに能舞台があつたらう。元氣になつたら、一度お城の地図を調べようなど楽しみをもつ。

夕食の赤飯とおかしらつきが何ともうれしかった。日曜日のこととて、夕方ふりにラジオで「小塩」(大江又三郎)をきく。夕方のテレビ狂言三題とラジオの「日本音楽道しるべ」義経物

「(横道万里雄、いづれもNHK)は家の者に頼んでおく。規則正しい病院生活でも、読書は許されていたので、「芸術の運命」(谷川徹三)「能」(保育社カラーブックス)「禅僧の道徳」(古田紹欽)をくりかえしよむ。「芸術の運命」数篇からは美と非美、芸術と非芸術、自然と無心の意味について

教えられ、「能」の解説(丸岡大二)のあたらしさに目をひらく。また売店で「日本の伝統いけばな」(淡交新社)に金剛能楽堂の鏡板の松、半部の立花供養の舞台写真などをひろう。それに思い出の本であるクセノフォンの

「アナバシス」の翻訳(世界文学全集第五巻)を見つけて記念に買う。そんなわけで期待していた「大原御幸」(六郎)も「天鼓」(猶義)もみられなかった。徳川美術館の能装束と能面展にも行けないでいる。もう一つ、苦言に

なるが、一月の「道成寺」(シテ、大槻文蔵ほか)のことで加筆しておきたい。それは鐘吊りのとき、登場者で心得ある二、三の役者をのぞいて、大部分が天井に目を注いでいたが、そういう光景はぜひ見たい。諸役が端座するなかに、狂言方の動作するさまがい

ろいろの音となつて伝わり、最後にギツという音を耳にして、一瞬「動と静」があだりに交差してこそ「道成寺」の舞台というものである。五月にもある由。かくあるようお願いしたい。三月の能や狂言が待ち切れない。

謡の地域別

西村弘敬

謡には色々の事柄が題材として取上げられて居るので、其主題に関係ある地域も相当広くなる。北海道を除いて殆んど全国に及んで居る様で、最も北の方では善知鳥の謡に出て来る外の浜(そとのほま)は青森県である。又最も南の方では俊寛の流された鬼界が島(之れは鹿児島県硫黄が島)であります。試みに之れ等の地域を各曲について調べて見ましたら大体左の通りになりました。便宜上地域を、東北、関東、北陸、近畿、四国、九州、唐土、中国の八区域に大別して見ました。

- 1 東北地方(三陸方面) 七番
 - 2 関東地方(東京を中心として之に近接する地域) 十八番
 - 3 北陸地方(三越方面及之れに近接する地域) 十五番
 - 4 近畿地方(京都を中心として之に近接する地域) 百二十番
 - 5 中国地方(山陽、山陰地域) 十八番
 - 6 四国地方 三番
 - 7 九州地方 十三番
 - 8 唐土(支那大陸) 二十三番
- 大体右の様な地域別となります。之

れ等の内には地域の判然とせぬものもありませんが何れかの内へ含めました。又謡の創作者たる観阿弥、世阿弥両先生を初め、其他の創作者の方々も京都を中心とする近畿地方が一番多く主題に取り上げられたるものゝ様に思はれます。九州地方は割合に多いのに四国方面は甚だ少ないのは何となく淋しい感がいたします。

四月の予告

- 四月 七日 観衡会囃子会
- 四月 十四日 観正会囃子会
- 四月 廿日 猶譚会
- 四月 廿一日 観世会
- 能 弱法師 片山博太郎
- 能 当 麻 佐藤卯三郎
- 能 当 観世鉄之丞
- 能 当 佐藤 友彦
- 能 郡 梅若 六郎
- 能 郡 井上 祐一
- 狂 寝音曲 野村又三郎 井上礼之助
- 四月 廿八日 長生会
- 四月 廿九日 幸友会
- 能 炎 上 井上 義次

協会支部よりのお知らせ

- 植村本子氏 能 鶴亀披 梗襲会社中
- 小川道子氏 能 経政披
- 葛原正枝氏 能 熊野披
- 高安勝久氏 能 狸々披 高安社中

酒 味 噌
た ま り

食 料 品

む と う 食 品 店

名古屋市昭和区川名本町1ノ10
電 話 (75) 6 2 6 4 番

狂言

昭和48年4月1日発行
 発行所
 名古屋市東区東門前町5/2
 井上重兵衛方 電話(321)1430
 名古屋狂言共闘社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電話 4817445

狂言人語

待ちかねた四月となりました。桜も桃も一度に花開き美しい色どりを添えてくれます。道行く人もコートを脱ぎ春の暖かさを身体中に吸収せんとする如くです。そしてまた女性のこの上もなく美しく見える季節、楽しい哉春。さあ今月も能楽殿へお通い下さい。

四月の催能

- 四月 七日 観銜会囃子会
- 四月 十四日 観正会囃子会
- 四月 廿日 猶謡会
- 四月 廿一日 観世会
- 能 弱法師 片山博太郎 西村 欽也
- 能 当 麻 観世鉄之丞 高安 滋郎
- 能 郎 耶 梅若 六郎 西村 弘敬
- 能 寝音曲 野村又三郎 井上礼之助
- 四月 廿八日 長生会
- 能 卷 絹 高田みね子 西村 欽也
- 能 祐 伊藤 長八 西村 弘敬
- 能 野村又三郎

狂言解説

狂重 喜 井上松次郎 井上 祐一
 四月廿九日 幸友会
 能 葵 上 杉田 合子 高安 滋郎
 井上 義次

寝音曲||謡がうまいのを主に聞きつけられた冠者、主の所望に酒を飲まねばまた女共のひざ枕でなければ声が出ぬと注文をつけるのですが……。

重喜||庵主に髪を剃れと云いつけられた新発意、剃刀を取り出し手合せしたのですが、弟子七尺を去つて師の影を踏まずのことわざを守ろうと……。

狂言花野

野村 広二

三月末の日曜日、久方ぶりにゆつくり休む。風はつよいがすつかり春であり。桜のつばもふくらみが目立つ。「花月」と「熊野」(金剛嶽、NHK)をラジオで聞く。翌四月一日はM教授にお会いする。来訪の用事をすましてから、そばをすすするため、テレビ塔横のM屋へ案内する。話が先日の会

食のことになる。安楽庵策伝にゆかりの屋号をつける店のあと、若い主人がカブキにごくくわしい店をたづねた。同勢四人。話芸研究のS氏に常磐津の勉強をする学生Y君とであるが、その若い主人は道成寺のことを語ってくれた。ほればれする女方の顔立ちはややく人をひきつけた。そのあとY君に、現代風にいきても、常磐津の語りに当今のうたがそのままではいけない。語りがモダンで大きく広げられても、常磐津の格は守られねばならないと話しあつたようだった。そのあと少し考えたことがあるのですと、そばのくるまでM教授にきいていただいた。それは、あのとき道成寺を三人三様でしてみせたが、その三人の役者はそれぞれその場所をうまくおさめて、次の動作にうつっていくはづ。Y君は、三味線相手に語るときでも、踊りのつくときでも、また全段にせよ、一くさりにせよ、位にしたがい、緩急、伸縮自在に、次から次へと進み、しかも大事などころをうまくおさめていくことが必要なのであろう。その場その場の花も考察されようし、語る人のよさも生れてこよう、それでこそY君の常磐津をきく気になるのではないかと。それから、狂言や能もおなじことと、「清経」の小書の演出をひきあいだした頃そばがでた。外へ出て陽光うらうらと輝く花園を少し歩いた。放送は「隅田川」(英雄)、「国栖」(野村保、梅村平史朗)、「黒川能」(翁と道成寺ほか、カラ、いづれもNHK)。本は「西暦一九六七年海外能開図之記」(橋岡久馬より寄贈)

「春日神社能装束」(岐阜日々、三一七)。催しは徳川美術館の能・狂言面と装束展。
 四月は「当麻」(鎮之丞)に期待したい。

西浦田楽

H O 生

台湾坊主の影響で全国的に降雪をみた翌日、二月十六日まだら雪の残る名古屋をあとに飯田線の水窪町に向かった。共同社のS・I両師も同行されるとあつて共に雪靴に身をかため、地元の人衆の一人であるM氏の出迎えをうけ、直ちに西浦へ行く。水窪町西浦は静岡県西部で長野県愛知県境に接し、天竜川の支流である翁川ぞいに広がる辺境である。戸数一五三戸というが離村の波はここにも及び実数一四〇戸が急斜面の山腹にへばりつくように散在している。西浦田楽はこの地に十六世紀より伝はる農事芸能である。祭事は完全な世襲制で能衆二六家で守られ、別当(祭主)、能頭、幕屋、面彩色など分担がきまり、旧正月十八日夜九時より明朝八時迄の夜を徹しての演事を山として、その一週間前より準備に入る。能衆は精進生活に入ると共に祝酒のしこみ、道具の修理などを始める。出迎えのM氏のように、能衆でも家に不幸のありしものは代役をたて、その年の祭事には参加させない。祭りにも殆んど経費をかけず、お祭とはほど遠いきびしいものである。能衆制で一般人の参加を許さず、部落の各戸が

狂言

昭和43年5月1日発行
発行所
名古屋市中区奥門前町5ノ2
井上重兵衛方 電(321) 1430
名古屋狂言共闘社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481) 7445

狂言人語

新緑の最も美しい季節となりました。木木の緑と、そこからこぼれる陽の光との調和が見事な神宮の神苑に相和する鼓の音が快く響く時、現実の世のすべての騒ぎを離れて、そのまゝ、夢幻の世界に溶け込んで行く様な感があるものです。

さて、今日は狂言では野村又三郎師の「也留舞会」、そして能では「名匠鑑賞会」が圧巻と云えましよう。是非御鑑賞下さい。
又、今日は社中より十二日「鳳鳴会」において大野弘之が「三番叟」を披きます。よろしくお願ひ申し上げます。

五月の催能

- 五月 三日 婦人師範連合会
- 五月 五日 巽 会
- 能 高野物狂 高田 真六 西村 欽也
- 能 班 女 佐藤 秀雄
- 能 班 女 玉井 弘子 西村 弘敬
- 能 舟弁慶 安田 俊子 高安 滋郎
- 能 井上礼之助 岡田 寿子
- 能 井上礼之助

狂 梟山伏 佐藤卯三郎 井上 祐一

能 翁 山本 一

能 三番叟 大野 弘之

能 千歳 中川 雅章

能 面箱 井上 義次

能 高砂 山本 一 高安 滋郎

狂 しびり 佐藤卯三郎 井上礼之助

五月十八日 也留舞会

狂 朝比奈 井上礼之助 井上 豊弘

能 朝比奈 井上松次郎

能 鉢木 高安 滋郎

狂 文荷 野村 万作 野村又三郎

狂 小傘 野村万之丞 野村 悟郎

五月十九日 霞 会

五月廿六日 名匠鑑賞会

能 定家 観世 元正 宝生 弥一

能 道成寺 片山博太郎 宝生 閑

能 野村又三郎 佐藤 秀雄

狂 花子 和泉 保之 井上松次郎

狂言解説

梟山伏は山から帰った弟が物の径にとりつかれました。早速尊い山伏に祈禱をたのんだのですが、能「葵の上」をパロディ化したものと云えましよう。

う。
三番叟は能「翁」の際に狂言方演ずるもの。躍動的な採の段と一転して壮重な餘の段と目出度く舞い納めます。狂言師の最初の関門、大野弘之の門出に御声援下さい。

しびりは和泉の堺へ使を云いつけられた冠者、しびりが起つて歩かれぬと座り込んでしまいました。元来子供で演ずることが多いのですが、今回は年とともにますます若さを発揮している佐藤卯三郎が演じます。

朝比奈は狂言「朝比奈」の中の語を独立して語るもの。剛勇無双朝比奈の「和田軍」の模様を仕方入りで松次郎演じます。

文荷は主の恋文の使いを仰せつかった二人の冠者、手紙が重くて持たれませんでした。とうとう中を開いて見ると、それもそのはず。

小傘は博打ですつてんになつた二人の男、にわか坊主になりすまし、まんまと田舎者をだまして……。

花子は花子に会いたい主人。一日一夜座禅をするとて妻をだまし、座禅を太郎冠者にまかせます。それが妻にばれて……。秘曲を宗家が演じます。

狂言花野

野村 広二

四月は、五日に伊勢神宮奉納能(金

春流)。当日は老母の代役で京都に行き、用事をすませて、東本願寺能をみる。熊野(巖)と山姥(今井幾三郎)に、にぎやかな花折(千作ほか)。舞台の左右の紅葉の青が今年も目にしみる。十四日は道成寺。故森川幸之助氏追善能で金剛殿氏所演。狂言はやわらかさと重量感のある二千石(茂山忠三郎)。関が原あたりはどちらの日も梅と桃と桜があざやかに咲いていた。観世会は当麻(鏡之丞)と邯鄲(六郎)によく意気の合つた寝音曲(又三郎、礼之助)。二十八、九日の連休は、前日の雨をよく降る雨だと眺めながら娘道成寺(尾上梅幸)をカラーでみ、二十九日は、能と狂言(正尊、元正、鬚櫓、三宅藤九郎ほか)のあと、ラジオで一調一声、一管、独吟、獅子などをきき、終日邦楽放送(いずれもNHK)を追つていたが、庭の卵の花が白く咲くの気がつき、それを水に浮かせてお茶を喫しようとおもつて、つい忘れてしまう仕末だつた。この頃さくらの展示会(名古屋園芸KK)へでかける。京都植物園出品、泰山府君、楊貴妃、野々宮、それに桐谷など能に縁のある銘をみつける。泰山府君のいわれに係りの若い人に話してきたのもこつけいだつた。また親鸞展で六道絵(国宝、来迎寺蔵)のうち修羅道、地獄道などの絵を大勢の老人たちにまじつてみる。これが四月にみた狂言や能などですが、近頃つくづくとおもうのは、狂言や能のみかたが、かわること、はじめはなんでもみたい、ききたい。それがだんだん好きな曲にかわる。やがてまたどの曲でもよくなる。そして好

きな曲はというとやはりでかけて行く。これに出演者がものが関係するの複雑になつてくる。しかしいつまでたつてもみられない曲もある。当麻は十年以上みなかった曲で、わたくしは松坂屋ホールで喜之氏の演能以来。そういう曲もある。でも、見所についていつも忘れていけない心構えは柔軟心のことで。本では、大蔵たより(三六号、寄贈)、能謡随想(斎藤太郎、絵書店)、古拙微笑の美術(滝井孝作、学鏡一月)外科医と能面(角田静男、芸術新潮五月)など。

五月の演能に期待したい。

水窪 (みさくぼ)

西浦の田楽を見て (その一)

佐藤 卯三郎

田楽は大和の国では古代より行われている祭り、又瑞穂の国ともうたわれて人類が主食とする米、麦、ヒエ等は生命の綱である。之等穀物を作るには、太陽の恵みをはじめ天体諸神の守護を受けなければならぬ。其神仏を祈願する一念から始まった祭りである。文化の開けない時分には其の願いの行き詰りから色々の話題とされていく悲劇もある。神に生贄を捧ぐるとかまた「姥捨て」という哀れな物語もある。されど文化の進んだ現代では山林は次第に切り拓かれ、交通は便利となり、かゝる悲話も解消された。去り乍ら一方、昔より代々伝わる田楽を固執している村落はダム建設等の為に段々

と取りつぶされ、免角交通に便利の悪い山里に残されている状態である。此田楽は我々古典芸術の文化財として保護されて行きたいことと思う。我々の田楽は支那より渡来した散楽と共に足利時代に文化の大成と共に構成された能狂言のオリジナルである。私は同志に誘われ此祭りを見学した。尤も無形文化財に指定されたものである。二月十六日午後五時名駅発、飯田線で水窪駅着、直に出迎えの方の車で翁川に沿い山の裾を縫い、約二里、山深く西浦の山里に着いた時は九時過ぎていた。車を降り懐中電燈を照し、ザク／＼と霜柱を踏み坂のあぜ道を登り、薄暗き明り障子が照らす家は別当の家である。此村は昔遠州相良——秋葉——信州飯田を結ぶ信州街道の要地として発達した所であつたと云つてゐる。山の中腹に正観世音菩薩がまつられてゐる。境内は山復のことであまり広くない。堂も三間足らぬ位で、しかもお粗末なもので正観世音菩薩と書いた細長い提灯が釣り下げてある。此の西浦の田楽は伝説によると、養老三年正月十日行基菩薩諸国巡回の際、当地に暫時足を止め正観音の仏像と数個の仮面を作り置かれたと文献に残されている。田楽の主催者は世襲で別当と云い、別当一、能頭三、能衆十七、外に相役三名(之は能衆の中には病氣等に依り出場出来ない場合の為に特定の相役とされている)又たよがみ少年とて七才から十二才までの少年、これは誰でもよい。これ以外の者は一切参加出来ない。定である。

六月の予告

六月二日	能楽俱樂部	能小	齋三島	齋	高安	滋郎
六月五日	熱田祭奉納能	一部	(午前十一時始)	野村又三郎	野村又三郎	高安
六月八日	和調会	能	放下僧	鬼頭嘉男	井上礼之助	高安
六月九日	青陽会	能	お冷し	井上松次郎	井上松次郎	佐藤秀雄
六月十五日	一謡会	能	二部	(午后二時始)	土蜘蛛	杉村竹翠
六月十六日	観世会	能	仲光	河村鉦三	高安	滋郎
六月十六日	観世会	能	野衣	柴田初太郎	西村欽也	西村欽也
六月十六日	観世会	能	引	井上松次郎	井上松次郎	井上礼之助
六月十六日	観世会	能	度	梅若方三郎	高安	滋郎
六月十六日	観世会	能	半部	橋岡久共	西村欽也	西村欽也
六月十六日	観世会	能	菊慈童	柴田初太郎	西村弘敬	西村弘敬
六月十六日	観世会	能	名取川	佐藤卯三郎	佐藤友彦	佐藤友彦
六月十六日	観世会	能	宝生会	宝生英雄	西村欽也	西村欽也
六月十六日	観世会	能	入間川	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎
六月十六日	観世会	能	萬	佐藤秀雄	高安	滋郎
六月十六日	観世会	能	入間川	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎
六月十六日	観世会	能	入間川	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎

昭和43年7月6日 午後5時始
於熱田神宮能楽殿

第十回

朝日狂言会

善竹忠一朗師。 茂山千五郎師来演

文相撲。 佐渡狐。 六人僧。 瓜盗人。 長刀応答 他=素囃子

主催 朝日新聞社・狂言共同社

狂言

狂言人語

世界中の平和への願いをこめて開かれたパリ会談、平和の象徴かに見えた美しいパリの都が一瞬の内に怒号と憎悪で燃え上りました。いつの世にも争いは尽きせぬもの、そして同時に平和を願う人の心はますます大きく養われ、行くはずで。

古典の世界があらゆる時代を越えて人々の心を打つのは、やはりそこにいるの世にも変らぬ人間の真の心が脈打っているからといえましょう。能の世界に寂々として流れる無常観も、狂言に見られる楽天的なまでの大らかさも悲劇も喜劇も、すべて現実世界の断面を鋭くえぐり取る様にして我々に訴えかけてくれます。古典を愛し続ける私達は、同時に現代をこの上なく愛するものです。こうした古典の愛好者を、もつともつとこの世界に拡げて行くため、私達は一層努力して行きたいと思えます。

六月の催能

六月 二日 能楽倶楽部
 小 督 三島 憲 高安 滋郎
 野村又三郎

昭和四十三年六月一日発行
 発行所
 名古屋市中区東門町5/2
 井上重兵衛方 電話(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電話(481) 7445

六月五日 熱田祭奉納能 一部 (午前十一時始)	能 放下僧 鬼頭 嘉男 高安 滋郎	狂 お冷し 井上松次郎 佐藤 秀雄	二部 (午後二時始)	能 土蜘蛛 杉村 竹翠 西村 欽也	狂 膏葉煉 野村又三郎 井上礼之助	六月 八日 和調会	能 仲 光 河村 鉦二 高安 滋郎	能 野 守 柴田初太郎 西村 欽也	能 羽 衣 佐藤 太後 西村 欽也	狂 首 引 佐藤 秀雄 井上松次郎 井上礼之助	狂 首 引 佐藤 秀雄 井上松次郎 井上礼之助	六月 十五日 一謡会	能 忠 度 梅若万三郎 高安 滋郎	能 半 菰 橋岡 久共 西村 欽也	能 菊 慈童 柴田初太郎 西村 弘敬	狂 名取川 佐藤卯三郎 佐藤 友彦	六月 廿三日 宝生会	能 芦 刈 宝生 英雄 西村 欽也	能 小 督 井上礼之助 高安 滋郎	能 百 萬 倉本 雅 高安 滋郎
----------------------------	-------------------	-------------------	------------	-------------------	-------------------	-----------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------------	-------------------------	------------	-------------------	-------------------	--------------------	-------------------	------------	-------------------	-------------------	------------------

狂言解説

入間川 井上松次郎 井上義次 佐藤卯三郎

お冷し例の理屈ツばい冠者、主の云うことにはなんでも抗らわなければ気がすみません。今日も水を「お冷し」と云つた主を捉えて口論が始まります。

昭和四十三年七月六日 午後五時始
 熱田 神宮 能楽殿
 主催 朝日新聞社 狂言共同社

朝日狂言会

文相撲 大 名 井上松次郎 佐藤 友彦
 佐渡狐 佐藤 茂山 千五郎 善竹忠一郎
 六人僧 井上 祐一 大野 弘之
 奈須与市語 和泉 保之
 素囃子
 神 舞 大 塚 鬼頭 八郎
 小 鼓 寛 田 鍋 惣太郎
 大 鼓 藤田 六郎 兵衛

瓜 盗人 瓜 盗人 善竹忠一郎 主 茂山千五郎
 長刀応答 大 塚 鬼頭 八郎 主 佐藤卯三郎 客 河村 丘造 立 井上松次郎

入間川「永々在京の大名、訴訟にも勝つて目出たく郷里へ帰る途中、入間川にさしかかりました。……入間言葉とは何んでも物をさかさまに云うことだそうです。」

六月はじめわが家に咲く花は七、八つ、十にも余るか。そのなかに紅の葵が今年も際立つて丈のびて一丈近く、小路をふさぐほど、格好も立派で、丁度「石橋」の牡丹のようにみえる。実は二日の金春八条七の金春追善能(大阪)に同曲がでて、その連想が特に強くなる。いろいろの石橋をみたが、これは、後半、親シシ、子シシが楽しく遊ぶさまを描いて、彼岸の浄土をみせた趣向のようだった。これがいままでとちがった意図と動作の裏付けにおもえ

入間川「修行を終えて帰る僧、授けられた僧名を忘れてはならじと袂に書き留めました。所が途中川を渡る時、その名を川に流してしまいました……。」

閉会 午後八時頃

た。さて、五月になつて、ようやく元氣をとりもどしたので、北陸に小旅行を試みた。熱田さんの花の標の前だった。緑のいよいよ濃くなる季節に久方ぶりの東海道線経由。伊吹の山容もいつも眺める京都行の新幹線とはちがつて、遠い昔の夢をさぐるようになつてしまつた。米原を過ぎると、西から山をみることになる。山裾がひらけて、南からの山景とはおよそちがう。名神高速のバスからは、山中で忽然と大きな伊吹山が眼の前に現われるようなコースで、これまたおもしろい。春夏秋冬また正月。雪、霞、晴天とそれぞれに山の姿―山肌と―格調―がちがひ、雲でそのまろい姿をみせてくれないときもある。雨のときもまたいいが、山をうしろに小さな丘の近くを走り去る新幹線の雪景色は、清浄な山野の光景で、正月の能見物にはふさわしいひととき、春霞のときは羽衣の連想さえおこる。ここを走る前後は、一つの対象をいろいろな時空の角度から眺めることが、まるで狂言や能を一番一番みたり、その方向をうかがうのとおなじようにおもえてならない。伊吹山に能界の姿をみるといつたらまちがいはないでしょう。北陸行は金沢の能楽堂をたづね、永平寺にもまいるつもりでしたが、どちらも果さず、すぐ田舎へひきこもつて、日夜、山のみどりと川の流に数日をすごすことになつた。福井あたり、はるかなあの山のどこかにお寺かと窓外に目をやつて、「生死のなかに仏あれば生死なし。またいはく、生死のなかに仏なければ生死にまどは

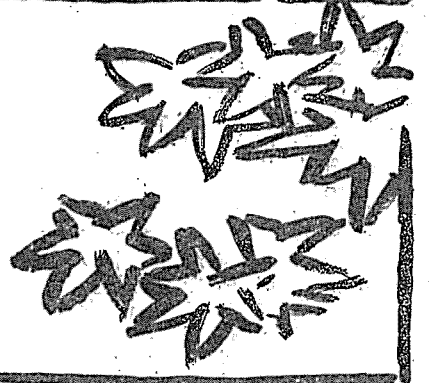
ず云々」(正法眼蔵生死)「山の運歩を疑うことなかれ」「山中人は不覚不知なり」(同山水経)など誦する。蓮華と菜の花がきれいで、田植のはじまる北陸であつた。

また六月は、銀行マンの井上祐一青年が、名古屋から東京銀座支店へ転勤する月になつた。狂言共同社の将来を背負つて立つ祐一君の上京に、心から活躍と健康と習練の充実を祈つて止みません。新幹線二時間の距離は近くてしかも遠いとおもいます。まづ十分に仕事に励んでください。肉体と心の健全さに意を用いてください。「東京の勤めと生活」になれたら、さあ、暇を惜んで、能楽堂巡りです。能楽の自足と閉塞と進路をみつめてください。先輩、知人、友達から、いろいろのことばを賜つたでしょう。いわく、三重戒。いわく、おもうままに。いわく、一生のみちをきめるときを迎えるであろうと。わたくしは広い心と目前心後のことばを、当道の大導師世阿弥から借りておくりたい。これと先述の伊吹山の話をときどきはおもいだしていただきたい。それから、東京だよりをこの「狂言」に書きおくることを待望したい。しばらくさようなら。

次は、メキシコ五輪の各種競技と並行しておこなわれる芸術展示に、能と狂言が六月上旬出発で参加します。二月の野村狂言団の渡米についての外国公演です。亀井俊雄、柿本豊次両氏が人間国宝の指定をうけました。毎月、京都観世会発行の「能」にのる明治百年能楽資料は楽しく拝見しています。

明治百年記念能開催の声も高いとか。記念能、追善能がたびたび催されたことは申すまでもありません。その一つ二つに参加しましたが、観世(片山博太郎、大槻文蔵)、金春(高橋汎)、金剛(金剛巖)、三流で「道成寺」をみたのは、上半期観能記録の少ないわたくしには、せめてものよろこびでした。狂言は千作、万蔵、忠三郎ほか東西の上手の来名ば今年もたびたびでしたが、千作の宗論(中日五流能)はみられ、なかつたし、能もみたい演能の三分の二は不参。そのなかに、「蟻通」(金春榮治郎)「邯鄲」(巖)「大原御幸」(六郎)「天鼓」(猶義)がある。しかし、鎮之丞の「当麻」、元正の「定家」、六郎の「邯鄲」のすばらしさが記憶にのこる。名古屋勢では、共同社の充実はこの上半期も十分。「翁」(山本一)に大野弘之が三番叟をつとめる。やるまい会には、井上礼之助が親子孫で「靉猿」(礼・斌資・豊弘)を演ずる。松次郎は朝比奈の語りとその堅実さを示す。これは今年一番のできになるのではないかとおもいます。ほかに若冠田鍋洋一が「道成寺」に小鼓で登場、他方高安滋郎は鉢木と隅田川の二つの語り在家元の貫録をみせました。催しでは万葉の花いけばな展(丸栄)でゆづりはと杜若をみつける。放送は「杜若」(巖)「野守」(橋岡久馬)「井筒」(桜馬道雄)「清水」(大蔵弥太郎、いづれもNHK)。本では、「ロンドン芸能界みてる記」(カナダ人の能見物、東京新聞、六・四、石原記者)「馬瀬の狂言」(継承者養成、伊

司子茶
茶葉茶葉
茶葉茶葉



中區丸の内一丁目五ノ二三
(23) 五七六九

勢新聞、五・三）「名古屋のヒュッシー教授」(毎日、五・六)「ゆつくり雨太郎捕物控」(三七回、生靈騒ぎ、週刊新潮、多岐川恭作、中尾進画)「黒川能面」(岩波書店の新刊表紙、四月)「角田静男博士と能面制作」(週刊現代、五・一八)「明妃出塞図巻一王昭君」(朝日ジャーナル、五・一九)「日本のニュークリティシズム」(幽玄という語、小西甚一、英語文学世界、六月)「国文学—中世のころと文芸」(六月)など。

きたるべき新能と朝日狂言会に期待したい。

能の文(ふみ)の事

西村弘 敬

能には手紙とか証文とか免状など其の外々の目的に文(ふみ)を用ふるのが大略十五番はある。文には小奉書紙を七つ半に折つて使い、無論何物をもしたためず白紙のまま用ふる、而して之を書く人も読む人も仕方方方ツレ方子方など色々であるが、其中に子方が文を書いて出すものに「高野物狂」「柏崎」「桜川」「自然居士」などがある。之れ等の子供は何歳位の子供と考へられて居るのであるか、其昔の時代は教育も今日程に行届いて居たとはいへぬのに果してよく手紙など書き得られたるか。桜川や自然居士の飄蕩文などは割合に簡単なものであるが、高野物狂の子方が家来の高師の四郎に与へた手紙には「天れ受け難き人身を受け、遇ひ難き如來の教法に逢ふ事云々」以下仏法の教へを取り入れて親子因縁の基底を述べてある名文

章は余程の達識の人ならでは到底書き得られないと思はれるのに幼少の少年に斯様の名文章が綴られた事にした謡曲作者の真意は如何なるものか。又柏崎の子方が母へ送つた手紙なども大体同様で、兎に角に幼少の子供が斯様の手紙を書くなど今日の小中学の生徒の作文などに比較して考へると、何となく不自然な感を抱くわけでありますが、大方の諸賢は如何御感じになりますか教示に与りたいと思ひます。

水窪

(みさくぼ)

西浦の

田楽を見て

(その二)

佐藤卯三郎

旧正月七日より行われる十五日迄は祭事の準備、七日は別当屋で酒作り(ヒエ酒一升)別当祝酒、之は十六日口あけ用。別当は年間を通して肉食をとらない。能衆は十一日より肉食をとらない。別当屋で能衆が酒作り(ヒエ酒)十六日の口あけ用、能衆祝の酒(此の酒作り用の大桶八直径三尺、高さ四尺)は当代別当の棺になる。別当は十五日より家族と別の生活に入り、

市民能

八月三日

橋弁慶

内藤 泰二

井上 祐一

梅田 邦久

高安 滋郎

野村又三郎

佐藤 秀雄

井上松次郎

他ニ舞囃子仕舞

大衆能

九月一日

一部

田村

伊藤鉄之進

西村 欽也

佐藤 秀雄

殿島 修二

高安 滋郎

佐藤卯三郎

野村又三郎

井上松次郎

二部

七騎落

河村 鉦二

西村 欽也

佐藤 秀雄

内藤 泰二

井上松次郎

食事も別火とする。酒(祝酒)とて当年の作がらの豊凶を占う。能衆も家族と別の生活に入る。

十六日午前八時、御開帳 御酒上、午後八時—九時、別当屋で能衆全員とたよがみ少年が集り、別当屋の神前にて酒上げを行う。本堂別当は松明に火を点じ観音堂に登り、燈明に点火する。九時三十分、御酒上げが終わると同時に十二の松明に火を点け(潤年は十三本)観音堂に登る(太鼓の囃子で)庭上り(踊りの庭へ出る)同時に下焚に松明で火を点ずる。こゝより田楽舞が始まる。舞終るのは翌日の七時頃。鑼りの焚木積上げ后三時—四時、全村民が一軒に二束の割で持ち寄つた焚を能衆全員と、全村民で積む。上焚(縦竈、舟渡用)は径五尺高三間—四間に積む。(この舟渡は焚迄本堂から二本の綱を渡り用と寒さよけ。

し、其綱の上を小さな船が人形を乗せて本堂の仏前から燈明の火を運んで行き、縦竈の頂上に点火する。其仕掛は見るべきものである)下焚(横竈)明踊り曲目は地能三十三番とはね能十番。田楽舞、仏の舞、のたくり、麦

つき、餅つき、鳥追ひ、そうとめ等色々あり何れも農業に關したもので、はね能は地能とや、性格を異にしたもので猿樂能を脚色したものである。翁、三番叟、鞍馬、八幡等能樂に關した名称の曲もあるが全く能樂に似たものでなく、たゞ鳴り物に合せて音頭をとり踊り廻るにすぎない。

能面—若男、老人、鬼、仏、猿、天狗、其他種々あつて二十四面。これに紙切れをビラ／＼張付けて使う。用いる道具は長刀、槍、太刀、鋸、斧(何れも木製)高足、箒、鈴、ピンサラサ(木製)其他種々ある。樂器は大太鼓に笛、さくら(竹製、木製)

服装は常の着物のまゝに袴或いはカールサン鳥帽子に鉢巻、ワランジ、ワラゾウりの出立ちで、物に依り太刀をはくこともある。又羽織水干を着ることもある。

囃子は小さな仮小屋で変化なき同調子のもので、曲目により和綴の本を地方が徐に節をつけて謡う。

地能のうたいの抜き書

一、地ならし

いやいや新しき年の始め、いやいや年男、空見ればんよう、空見れば空こそよけれ、やとみふるよとて、とみぞましますやら目出たや、いやいや新しき年の始

一、いやいや春くれば、まず我稿をまきそめんよう、まきそめて、しむらせしらわせと、やああわを中に、おくほなかに、なかてまさらん、やら目出たや

一、麦つき

あゝれ今年はしんにや、とうしどうし、なごのよがり、あゝれとうさぎはんにや、麦つけとのなごのよぶよがり、あゝれとうさぎはんにや、あれ白に米入れて娘呼声は、誠うちでのごの声、あゝれ白に麦入れて嫁子呼声は、とうさぎ石のはねの声、チャテイ／＼、チララウラーラ、あゝ麦走りかけて、むはよぶんにや、はかまをきせて、またよがり、あゝれ麦ひれてふんにや。志らげばもとえよれようがり。あゝれこがらさぎはんにや。あゝれ白金ふんにや。ひしやくにまげて、またようがり。あゝれとうさぎはんにや。てんごんとの麦あら糸金。千国になる時やかへる。ひやう／＼。

踊り始めは先づ地ならし別当が袴、羽織、烏帽子に刀をはき扇をひろげて踊り回る。約三十分。なかなかの努力であるが極めて静寂で無心になつて踊る。其素朴な芸は、民族芸能の昔を忍ぶ豊かさである。観衆も又静かで、時々パチン／＼と篝火のはぜる音が囃子物にあしらうあやしき。

東の山の端より登る月は、ひときわびえ寒風身に凍む寒さを感じた。唯、聖火の篝火こそ有難き温情である。

七、八、九月の予告

七月 六日 朝日狂言会
 七月 七日 正楽会 ゆかた会
 七月十四日 調友会
 能天 鼓 山本 真義 高安 滋郎

狂八 尾 井上礼之助
 井上松次郎 佐藤卯三郎
 地蔵 佐藤友彦 佐藤秀雄 井上礼之助

八月 三日 市民能 熱田神宮境内 仮設舞台

八月 十一日 協会半歌仙会

九月 一日 大衆能 熱田能楽殿
 九月十五日 観世会 素謡会

九月 廿二日 観友会 準師範披露
 能 蝶 丸 加藤正先 西村 欽也
 高木美智子

能 菊 慈童 深見弥太郎 高安 滋郎
 能 乱 観世 武雄 西村 弘敬
 観世 喜之

狂 蚊 相撲 井上松次郎 佐藤秀雄
 井上礼之助

九月 廿九日 九皇会 於 四日市市民ホール

能 安 宅 塚本 秀雄 高安 滋郎
 井上松次郎 佐藤 秀雄

能 紅 薬狩 観世 喜之 高安 滋郎
 佐藤 友彦 大野 弘之

狂 三人片輪 佐藤卯三郎 井上 祐一
 井上松次郎 井上礼之助

九月 廿九日 竹韻会

能 羽 衣 杉村 葵子 西村 欽也

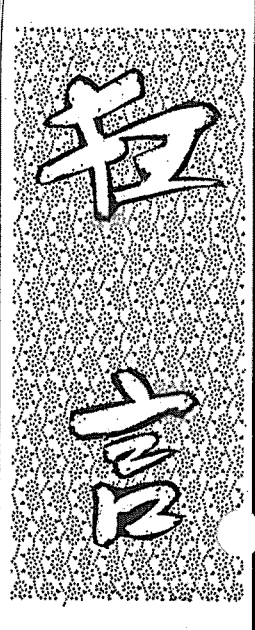
協会よりのお知らせ

後藤玉恵氏 舞囃子披 片野社中
 小島由子氏 ” 片野社中
 七、八月は休刊します

舞 見 中 暑

一	邦	藤	長	中	竜	観	霞	潤	観	観	高	た	舞	調	名
河村 鉦	梅田 邦	梅田 邦	鬼頭 八郎	前田 昌	藤田 六郎兵衛	衛	田鍋 惣太郎	林 甲子夫	野崎 太	久正 秀雄	高安 滋郎	田鍋 惣一郎	内藤 泰	鍋惣太郎	名古屋能楽鑑賞会
二	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会

名古屋能楽倶楽部	風	幸	金	掬	曲	春	正	松	清	青	名古屋支部	名古屋和泉会	狂言共同社
植村 真太郎	殿島 修二	福井 啓次郎	片野 東四郎	柴田 初太郎	増田 一雄	山田 仁三郎	加藤 丈太郎	佐藤 太俊	大家 一家	青陽会	協能楽会 支部長 田鍋惣太郎	名古屋和泉会	狂言共同社 (イロハ順)



狂言人語

静かな緑の山間に突如襲った悲劇、都会の騒音を逃れ、親子水入らずの休暇を山上に求めようとした百余名の人々の夢は一夜の集中豪雨に悲しく葬り去られました。犠牲者の冥福を心からお祈り致します。

海に向うではチェコの情勢など、暗いニュースが目立った今年の夏ですが、でももう9月、芸術に、スポーツに、最も充実した季節がやって参りました。名古屋能楽界の秋も、九月一日「大衆能」で華々しく出発致します。そして芸術祭参加の番組、明治百年記念公演などが目白押しに並び、そしてスポーツも十月のメキシコオリンピックに向けて最高の盛上りを示すことでしょう。

扱、今月は特にこのオリンピックを控えたメキシコへの公演旅行からの程帰国された三宅藤九郎先生より本紙宛の玉稿を賜りましたので本号に掲載させて頂きました。公演の成功を皆さんと共に心から喜び合いますよ。

狂言解説

不見不聞―耳の遠い太郎冠者では留守が不安と座頭の菊市を頼んで主は外出

昭和43年9月1日発行
発行所
名古屋市中区奥門前町5ノ2
井上重兵衛方 電(321)1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481)7445

しました。つんぼと盲目のとり合せ、互いに相手をからかいます……。

文荷―恋文の使を仰付られた二人の冠者、あまりの文の重さに遂に中を開いてしまいます。重いのも道理、紙面いっぱい小石(恋し)だくさんに書かれておりました……。

蚊相撲―冠者一人しか召使わぬ大名、新参者を抱えんと思いいちました。早速冠者の連れて来た江州守山の在の者聞けば相撲が得意とのこと、喜んだ大名自ら相手になります……。

三人片輪―博打ですっかりうち込んだ男三人、或る有徳人が片輪者を抱えんと高札を立てたのを知り、各々にわか片輪になりすましまんまと抱えられました……。

九月の催能

- 九月一日 大衆能 熱田能楽殿
- 九月十五日 観世会 素謡会
- 九月廿二日 観友会 準師範披露
- 能 丸 加藤 正光 西村 欽也
- 能 菊慈童 深見弥太郎 高安 滋郎
- 能 乱 観世 武雄 西村 弘敬
- 能 蚊相撲 井上松次郎 佐藤 秀雄

- 九月廿九日 九阜会
- 於 四日市市民ホール
- 能 安宅 塚本 秀雄 高安 滋郎
- 能 紅葉狩 観世 喜之 高安 滋郎
- 能 三人片輪 佐藤 友彦 大野 弘之
- 能 竹韻会 井上松次郎 井上祐一
- 能 杉村 蓉子 井上礼之助
- 能 西村 欽也

- メキシコ行
- 三宅藤九郎
- 今年十月に、メキシコで第九回オリンピックが開催されるが、それに関連して、一月から十二月まで、文化オリンピックとして国際芸術祭があり、日本からは能楽が送込まれた。これは、国際文化振興会の明治百年祭を記念しての文化交流の一つでもある。

昭和四十三年十一月九日 午後五時始

第八回 和泉会

主催 名古屋和泉会 狂言共同社

熱田 神宮 能楽殿

主 井上松次郎 井上豊弘

茶 壺 野村又三郎 佐藤秀雄

靴 猿 井上礼之助 井上豊弘

枕物 狂 三宅藤九郎 右近

千切木 和泉 保之

他に素囃子、一調

「人」の相手役を三宅右近とし「棒縛」の主は和田喜太郎君ということにした。今まで、能狂言の海外行きは数回あったが、日本政府からの派遣は今回が初めて、この能楽団には特に文化使節の資格が与へられ、メキシコのほか、米国各地も巡演した。

六月四日に東京を立ち、米国ワシントン、ニューオリンズの二ヶ所の公演の後、十日にメキシコシティに着いた。雨期というがムンムンする様な暑さを感じた。エキゾチックで色彩的な街、メキシコ人は一様に小麦色の顔をしていて日本人と同じ背丈の人が多く、我れ我れ民族とどこかでつながっているという云い伝へも成程そうだなと思へて好感が持てた。標高二千二百三十七メートルで富士山の五合目とほぼ同じと聞いていたので、喉を痛めぬ用心にと、名物酒のテキーラも飲まず、うがいなどをして声の調整にとめた。

公演は三日間で、最後の日はマチネ1があり合計四回公演したが、会場の国立劇場の鏡の間には大きな酸素吸入の機械が物々しく置かれてあった。この吸入をして出演するのである。

「棒縛」は、アトの次郎冠者との応

酬があるのでさのみ苦勞は無いが「瓜盗人」は、ほとんど独演のものなのでこれは余程息の配分に考慮を要すると思つた。

舞台へ出る直前、十分間ほど吸入をして登場したが、前ジテで、案山子を崩してツルを捲り、あわてて瓜を懐中し、セリフを云いながらの走込みのときには、かつて経験しない息苦しさを感じた。

この「瓜盗人」はスペイン語の解説書に「メロン泥棒」としてあった。

演技上のつらさは能の人も同様だったと見へ、当然つづくはずの息がつづかなかつたと、六郎さんも鉄之丞さんも云つていられた。

滞在一週間、絶へず頭痛が去らなかつたのも、今では思出の一つである。メキシコ五輪で、日本選手優勝の頼みの綱は、マラソンにあると聞いている。先月あたり、富士山の五合目の高地で練習を続けていたようだが、あの空気の薄いメキシコで、佐々木、宇佐見あたりの選手が、はたして世界最高の記録を樹立出来るかどうか、芸能と運動との違いはあつても同じヒノキ舞台だけに気になる。

狂言花野

野村 広二

八月も下旬に近い日曜日、芙蓉と紅蜀葵の花がひらき、二十日をすぎると朝の冷めたさがにわか身近に感ぜられた。今年夏は夏もきれいな姿は余りみかけなかつたが、七月六日の盛況だつた朝日狂言会、これには来年も十分に期待を寄せていいが、これ以上に盛会だつた新能には、熱田さんの庭の大きな木立をすかして、かすむ空にか

かる月をみたのは余情あるものだった。その新能は、去年の若宮八幡より熱田神宮にうつつたのですが、春の舞楽神事の催される広場で、どこに舞台、見物席をつくつても工合よく落着くところ。長谷権宮司の火入式は格調高い。みる人の熱気がふんい気やいが上にも高まらせていた。参道の電灯の明るさもなかなか意が用いられてきた。さて、今年の夏もM教授とどじょうを食べるお伴をする。上京した平曲の大評判、名古屋で四つ開かれる夏期源氏物語講座、新能、この頃の能、狂言の研究発表の事など話し合いました。天ぶらそばをする店に席をかまえた頃には話が次第に乱れていった。

この夏は身辺多事で、三冊の本を読もうと心がけてついに果さなかつた。まことに恥ずかしい。放送では「山姥」(金春信高)「黒塚」(九郎、テレビ)「関寺小町」(梅若六郎、ラジオ、いづれもNHK)。本では「小説、渡辺華山」(三四回、杉浦明平作、水谷勇夫え、この画も佳、七〇一七頁、朝日ジャーナル、八、二五)「狂言」(二九号、野村狂言団米加兩國公演旅行特集、寄贈)「一角仙人」(渡辺照宏、大法輪七月、日本文学と仏教聖典)「読書とある人生」(福原麟太郎、新潮選書)「夢幻平家」(網野菊、太陽七月平家物語の世界特集)「能のふるさと」(興福寺新能)「近鉄、真珠六六号」(なお平曲関係は「民俗芸能」(三三三号)「芸術新潮」(七月)「FMFM」(七、一五号)読売(五、二〇夕刊)朝日ジャーナル(七、五号)。ほかは次号に。

九月は大衆能の成功を祈りたい。

十月 十日	松謡会	能 上	金剛	能 俊	寛	能 二人大名	梅若六郎	能 先代追善能	梅若 盛義	能 善知鳥	梅若 三郎	能 葛城	梅若 三郎	能 魚説法	佐藤 秀雄	能 盛久	山本 勝一	能 杜若	久田 秀雄	能 小鍛治	加藤 丈太郎	能 樋ノ酒	井上松次郎	能 鬼頭五郎	六車 真三	能 山姥	北村 利弥	能 舟弁慶	笹 墨水	能 三三	佐藤 三郎	能 葵袍落	和泉 保之	能 十月廿六日	修諷会	能 十月廿七日	名匠鑑賞能	能 小袖留我	観世 武雄	能 卒都婆小町	観世 喜三郎	能 能殺生石	梅若 六郎	能 能	井上礼之助	能 能	三宅 藤九郎	能 能	井上松次郎
-------	-----	-----	----	-----	---	--------	------	---------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	------	-------	------	-------	-------	--------	-------	-------	--------	-------	------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------	---------	-----	---------	-------	--------	-------	---------	--------	--------	-------	-----	-------	-----	--------	-----	-------

60年の歴史を誇る老舗……

貴金属・アクセサリ・喫煙具・オルゴール

花本商店

名 名古屋市中区栄2丁目16-10 <中日シネマ前>
電 話 (231)2891・6727 (211)1019・1974

▶ 宝石のことなら何事によらず御相談下さい。

も二人はチームワークよろしくたらふく飲んでしまします。

狂言花野

野村 広二

九月上旬、今年も庭にカネタタキの声をきく。いよいよ秋を迎える。十五日敬老の日は、朝まづ謡曲三番を放送できく。「高砂」(近藤乾三)「養老」(後藤得三)「鶴亀」(藤波順三郎)。「め」でたさと明るさとなごやかな気分になる。ひるすぎのラジオで地唄集に名古屋から「山住まい」を、そのあと、「芸ひとすじ」の放送が町田佳声氏の司会でおこなわれる。浅井丸留子さんが、唄う端唄のなかに名古屋甚句がでた。すばらしい。若いときにきいたこの人のはりと、品のよさが急によみがえってくる。米川文子さんの箏曲「千鳥」(荻江露友さんの新曲「木曾路」も楽しくきいた。どれも格調の高い演奏で、古格を守り抜く気迫がひしひしと伝わってきた。世にいう、老人を大事にしてあげるということのほか、伝統を守り、古典芸能の遺産を伝えてくださった点からも、広く年老いた諸先輩に敬意をはらわねばならぬことはいうまでもあるまい。これは能楽界でも同様のことと思います。

次は楽しいニュース。井上義次、大野弘之両君が職分となり、能楽協会員になったこと。井上祐一、義次兄弟に、佐藤友彦、大野弘之君たち諸青年が、まだまだ参加する青年の成長をまちながら、次の時代を築いていくあたらしい地盤ができあがった、この門出を心から祝したい。それとはちがって悲しいよりは、丸岡明氏の逝去です。そ

の功績はいろいろの追悼文にのることでしょうが、わたくしは故人の著「現代の能」(昭二九、三、能楽書林)に随分とお世話になりました。第三篇の「先代喜之氏のこと」「坂元雪鳥氏」千作(先代)翁と野上博士」などなつかしい文章です。さて、今年の大衆(普及)能は九月一日盛會に催され、名古屋勢による能、狂言の普及に大役を果たすことができ、大層結構なことといえましょう。来年は十周年を迎えるはず。主催者の奮起を望んでやみませぬ。放送では「雨月」(金春信高)「松虫」(友枝喜久夫)「宗論」(三宅藤九郎、以上ラジオ)「汐汲」(尾上梅幸、テレビ)。また院展の百年回顧も堅山南風画伯出席のテレビでみる。なかに「大物浦」(安田靱彦)「桜川」(森田耕平)が今年の出品の紹介にあった(高砂以下いづれもNHK)。展覧会が待遠しい。本では、「野趣」(近く春と松島秋色、滝井孝作、大和書房)「翁草」(狂言の小舞ほか教篇、同氏著、求竜堂)。どちらにもカラーの能面が一枚づつ口絵にのり、「野趣」の方は志賀直哉氏から贈られた黒式尉のオモテ。「野方」より「野島善衛氏の計報」昭和40年の観世流ヨーロッパ演能曲目の翻訳、英語青年十月号、R、F)「観世寿夫論」(塚本康彦、伝統と現代十月号)「伝説と現代」(六平太翁のことば、朝日標の欄、九、九)「モンザエモン」(伝説の保護、同紙標の欄、九、一七)「利休とミケランジェロ」(淡交九月、参考)など。

芸術参加の催しが目につく秋の行事に期待したい。

十一月の予告

十一月三日	九皋会	能合	甫	吉田	隆	西村	欽也
十一月三日	邦謡会	能	葵	上	植村真太郎	高安	滋郎
十一月三日	和泉会	狂	二九十八	井上松次郎	井上礼之助		
十一月十日	風韻会	能	小袖曾我	殿島満里子	殿島	博子	
十一月十日	童神会	能	菊慈童	小野	好子		
十一月十日	岡崎隨念寺	能	紅葉狩	福間	昌作	西村	弘敬
十一月十日	岡崎隨念寺	能	栗	井上松次郎	井上礼之助		
十一月十六日	霞会	能	高	砂	梨本	秀治	高安
十一月十六日	観世会	能	栗	焼	佐藤	秀雄	西村
十一月十七日	観世会	能	東方朔	大槻	秀夫	西村	弘敬
十一月十七日	和泉	能	葛	城	山本	博之	高安
十一月十七日	井上礼之助	能	山	姥	観世	寿夫	西村
十一月十七日	井上松次郎	能	清水座頭	和泉	保之	井上松次郎	
十一月廿三日	邦謡会	能	土蜘蛛	谷野	武二	博	西村
十一月廿四日	柳水会	能	呂	蓮	佐藤	卯三郎	井上礼之助
十一月廿四日	名大学生室生会	能	教	盛			
十一月廿四日	名大学生室生会	能	太刀	奪			



花 甚

本社 中区新栄町 4
 東新町電停東 CBC放送局西隣
 TEL (25) 0471 代表

直売店 駅前豊田ビル一階 TEL (551) 4587
 名古屋駅表玄関 TEL (551) 9078
 駅前大名古屋ビル TEL (561) 5760
 温室 千種区猪高町西一社 TEL (701) 0025

「和泉会」への期待

老いらくの恋に狂う

枕物狂の世界

芸術の秋——目白押し

に並んだ芸能番組の中に、今年も狂言「和泉会」の名が健在している。「朝日狂言会」や「るまい会」と並んで名古屋の地に地味ながら確実に狂言を定着化させつつある恒例の秋の催しである。別掲の如く豪華番組を取り揃えているが、中でも今回の話題は三宅藤九郎師演する所の「枕物狂」に尽きると云ってよいだろう。

名古屋での記録をかかほること約半世紀

大正七年十一月共同社の大先輩角淵新太郎演じて以来のものであり、東西でもめったに観られることのないものである。(初代井上菊次郎は東京で勤める)

能に「関寺小町」「松垣」「磯捨」と三つを「三老女」といい、いわゆる老女物の内でも特別に重い曲として取り扱われているが、狂言でこれに当るのが「比丘真」「庵の梅」とこの「枕物狂」の三曲で、前二者は尼、枕だけは祖父であり、いずれもかなりの芸力の上に年令が大きな条件であり、長年の修業をつんだ「名人」のみに許される

曲である。

百歳に余る祖父が老いらくの恋に陥っているという孫達に連れだつて見舞いに出かけた。なるほど祖父御は女の持つていた枕を狂い狂の先につけて恋しや恋しと物狂い、心配する孫達に初めはあれこれ言葉を濁していた祖父御も、隠すより表わすはなし、いつかこの成り初めを物語る次第となつた。聞けば辻の刑部三郎の妹娘乙御前(おとこぜ)恋し、それではと孫の一人が連れて来た件の女に「なう、いとしい人」と寄り添い手を取り合つてむつまじく退場する。

百歳に余る老人の老いらくの恋、ともしればいや味になりそうなの曲を品よく、しかも老いての色気を漂よわせつつ、それを狂言の味を損ねない範囲で表現せねばならない難曲である。年頃の修練をつみ、老いてなお華やかな芸風を保持出来る師がはりつめた気力でこの物狂いを演ずる時、狂言の一つの極致を堪能させてくれるだろう。

元来、老人が笑いの対象とされるのは所謂「年寄りの冷水」的な場合が多く、年にそぐわぬ若がり、強がっての行動を取ることが笑の対象とされるのだが、そこでの笑いはしばしば片輪者に対する笑いと同様の性格がうかゞわれ、その笑いとはかく憐憫の情とは隣合せのものである。従つて笑いが露骨になれば観る者の側に自然不快の念を起させることがある。「きわめて色は黒うして口は歪みて目はくさり、老い

ばれたる」百歳に余る父が若い娘への恋に狂う、という筋立てだけを取り上げて考えると滑稽さを通り越して不快感を感じさせる程であろう。そうした危険性をこれは狂言としてうまく処理していると言えぬ。

まず第一にその構成である。最初の祖父の出から地謡がつき、四拍子が入つて物狂い、舞あり、語りありと多分に能がかりとなつていく。これはリアルさを極端に押し殺す役割をしているのだが、同時にそれは能を連想させることにより、かえつて狂言の性格を浮き彫りにする効果も果しているのである。即ち、この「老人が若い女性への恋に狂う」という筋立てから誰もが思いつくのは、能の「綾鼓」と「恋重荷」であろう。身分の卑しい老人が高貴な麗人への恋に狂うその恋は、最後まで愚弄され、救いなき悲劇として展開される。能はこの老人の執念を真向から取り上げ、悲劇として高めているのである。(但し「恋重荷」では最後に救いが見られる) こうした能に立脚して創られたであろうこの「枕物狂」は古く天正狂言本にも「恋のおふぢ」として見えているが、能に対してあくまで狂言は、喜劇としての構成をとっている。能の構成は老人の女御に対する恋その心理を追求する。そしてその怖ろしいまでの執念を形象化している。

(そうした意味では「綾鼓」の改作といわれる「恋重荷」ではその結末にいささかの不自然さが感ぜられる)だが狂言では老人の執心はその性格と相まって初めて表現される。即ち、孫が訪れた時の祖父のひがみにも似たぐちをこぼす場面、孫達の尋ねるにに対し様々と口を濁しながらついには昔物語をひきつゝ自らの恋を白状する場面、また

「足ずりしてぞ泣き居たる」とまるで子供のような無邪気さと、その老人の性格を端的に表わしながら、その中にきりめくような執念を表現して行く。

そして最後に孫が件の女を連れて来て「是こそおことの尋ねる乙御前よ」と被いだ衣を取つた時、観客の笑の対象はそれまで老いの身もわきまませず恋に狂う老人にのみ限られていたのから、この狂言そのものに對する明るい笑へと昇華することだろう。そして御前の手を取り喜々として退場する祖父の姿を見送る時、観客の心には不快さは残らない。ほのくとした明るい気持で満たされるはずである。即ち、この乙御前が美しき女御、貴婦人であったとしたら、狂言はおそらくその生命を存続し得なかつたと思われ。それは悲劇を約束させてしまうからである。能の二曲には老人と若い女という年令以上で越えることの出来ない大きなへだたりとして身分の差がある。だが「枕」の乙御前は同じ町衆、辻の刑部三郎の娘である。

同じ題材の取り挙げかたに狂言と能では大きな差が感じられる。

ともあれこの稀曲、難曲を藤九郎師の芸で観賞出来るのはうれしいことである。大いに期待したい。

賑やかな「千切木」

これはまた賑やかな曲である。とかく狂言の夫婦は男が女の尻に敷かれっぱなしである。さんくになぶられて帰つて来た男を女房が尻をひっぱたく様にして仕返しに出かけるというのだからおもしろい。弱虫男に宗家保之氏以下、共同社総出演での賑やかなフィナーレとなることであろう。

(鈍太郎)



昭和43年11月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町5/2
井上重兵衛方 電(321)1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481)7445

狂言人語

発行の遅れたおかげで十一月九日和泉会の「枕物狂」を観ることが出来ました。藤九郎師の芸、その気力が舞台と見所にびんと張りつめた緊張感となつて鏡の間まで伝わり、思わず姿勢を正した程。美しい響きを持つその声...

十一月の催能

十一月三日 九皇会
能合 甫 吉田 隆 西村 欽也
能 葵 上 植村真太郎 高安 滋郎
十一月九日 和泉会
十一月十日 風音会
小袖曾我 殿島満里子 殿島 博子

十一月十日 竜神会 岡崎随念寺
能 高 砂 梨本 秀治 高安 滋郎
能 栗 焼 井上松次郎 井上礼之助
能 栗 焼 井上松次郎 井上礼之助
能 栗 焼 井上松次郎 井上礼之助
能 栗 焼 井上松次郎 井上礼之助

狂言解説

二九十八未だ定まる妻のない男、清水の観世音に祈誓をかけ申し妻を授かります。お告げ通り西門の一のきざは行くからと所を尋ねると「にく」と一...

と云い合す所へ、立派な太刀を持った奉行人が通りかゝりました。おつちよこちよいの冠者はその太刀を奪い取ろうと手を出しますが...

狂言花野

野村広二

附祝言

大獅子 橋 藤田六郎兵衛 高安 滋郎 殿島 修二
大獅子 橋 藤田六郎兵衛 高安 滋郎 殿島 修二
大獅子 橋 藤田六郎兵衛 高安 滋郎 殿島 修二

十月、名古屋では珍らしく新作能が新様式でおこなわれる。ポールの生誕百年記念行事の一つに「女と影」が能様式で演ぜられた。この土地がその別作品にとりあげられており、当地の能狂言研究の方は、だれでもその能に対することばを一度は味わってみねばならぬ、名古屋で上演された。不即不離の立場で開演開眼のよさをみせる舞歌二曲が、ここでは全然別々に進行して終るといふ、そういった二重性の企画、演出は、統一はあったが、他方いろいろの問題もあるにせよ、東西の世界が能をおして通いあえて大層よかったとおもう。「縛」を名匠鑑賞能(58)でみる。三宅藤九郎と和泉保之のやりとりは

怪妙。観世喜之が「卒都婆小町」をまう。三番目物の幽玄を無視するわけではないが、四番目物の性格を強調し、これにもとづいてドラマティックに演じ、切りのおさめ方も佳。また明治百年記念を祝して、古典邦楽鑑賞会が催される。名古屋の舞楽あり、平曲あり三曲、尺八、地唄舞、それにもちろん狂言と能も一堂に会する。それは、その間に何回かおそった伝承の断続への不安を立派に克服して、いまその隆盛を目前にすることが出来るのは快事といえよう。講演会は「世界における日本美術」(谷川徹三氏)。実に広い視野から能の本質にもふれられ、含蓄あることばを数々きく。目からうろこがとれる思いであった。放送は「卒都婆小町」(山本博之)「放下僧」(宝生弥一、ラジオ、NHK)。本は「豊嶋弥左エ門の融」(今井欣三郎、朝日ジャーナル、11.3)「父ポール・クロデルのあとをたづねて」(ピエール・クロデル、毎日、10.31)「鎌倉新能」(立原正秋、サンケイ、10.6)此秋は、京都に「関寺小町」(観世、杉浦友雪)(ワキ高安滋郎)と「伯母捨」(金剛、今井幾三郎)十一月の名古屋は「枕物狂」と「山姥」(観世寿夫)が期待される。

熱田と揚貴妃

西村 弘 敬

昔支那(今の中華民国)の秦の時代に徐福と申す人が皇帝の命によつて、不老不死の薬を求めに東海へ行った事がある。其東海とはどの辺の事か明らかでないが恐らく日本ではあるまいかと思はれる。日本の内でもどこかかわかぬが、多分蓬萊宮かとも思はれる。此蓬萊宮とは、熱田、熊野、富士、白山、殿島、住吉などと色々には言はれるので確とは判らないが、其のどこかへ徐福が来たもの様で、又富士山と云う謡曲には富士山へ登り不老不死の薬を求めて帰ったので、山の名を不死山

と改めたと書かれて居る。鎌倉末期に比叡山の僧光宗が書いた「蓬萊宮」とは熱田の社なりとあつて熱田と揚貴妃との関連を語ひあげて居る、之れは玄宗皇帝が北は滿鮮方面から南方は南海の諸島に到る迄手に入れた全盛の余勢を以て日本を侵略浸入せんとするを、日本の神々より結局懐柔策を取る事と叶ひ難きにより結局懐柔策を取る事と渡り、揚貴妃に交身して玄宗皇帝に取入り、遂に玄宗皇帝を懐柔し日本攻略を思ひ止まらせ、其後安祿山の乱の際に馬鬼ヶ原にて殺されたが其後は熱田に帰り神鎮まりましたとの事である。揚貴妃は後宮の美人三千人の顔色なからしめたる程の麗人であつたので玄宗皇帝もつひつひこれに引かれたるもの様に思はれる。江戸期に流行したる川柳に色々取り上げて居る。揚貴妃はもと神州のまわしもの日の本を攻めなすびなど貴妃は云ひやまと言葉おとくびに貴妃出さず玄宗の尾張おとくびにたらされる三千の一人は熱田へ御遷宮以上は鎌倉末期から熱田と揚貴妃の伝説は鎌倉末期から称へられ今でも熱田の地名を蓬萊と仮称する人もある様で、何共信じ難い浮説ではあるが右の様な伝説の有つた事は事実の様である。

十二月一月の予告

- | | | | |
|---------|--------|---------|-------|
| 十二月一日 | 全春会 | 十二月八日 | 宝生会 |
| 十二月十五日 | 乱能 | 十二月十六日 | 学生鑑賞会 |
| 十二月十八日 | 野口 | 十二月十九日 | 佐藤 秀雄 |
| 十二月二十日 | 大野 弘之 | 十二月二十一日 | 高安 滋郎 |
| 十二月二十二日 | 衣妻 正宜 | 十二月二十三日 | 井上礼之助 |
| 十二月二十四日 | 佐藤 友彦 | 十二月二十五日 | 高安 滋郎 |
| 十二月二十六日 | 佐藤 卯三郎 | 十二月二十七日 | 井上礼之助 |
| 十二月二十七日 | 佐藤 卯三郎 | 十二月二十八日 | 井上礼之助 |
| 十二月二十八日 | 佐藤 卯三郎 | 十二月二十九日 | 井上礼之助 |
| 十二月二十九日 | 佐藤 卯三郎 | 十二月三十日 | 井上礼之助 |

- | | | | |
|--------|-------|--------|-------|
| 一月十二日 | 青陽会 | 一月十三日 | 高橋 勝一 |
| 一月十四日 | 井上 義昭 | 一月十五日 | 高安 滋郎 |
| 一月十六日 | 観世 元昭 | 一月十七日 | 高安 滋郎 |
| 一月十八日 | 佐藤 秀雄 | 一月十九日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十日 | 塚本 秀武 | 一月二十一日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十一日 | 井上松次郎 | 一月二十二日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十二日 | 井上松次郎 | 一月二十三日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十三日 | 井上松次郎 | 一月二十四日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十四日 | 井上松次郎 | 一月二十五日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十五日 | 井上松次郎 | 一月二十六日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十六日 | 井上松次郎 | 一月二十七日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十七日 | 井上松次郎 | 一月二十八日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十八日 | 井上松次郎 | 一月二十九日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十九日 | 井上松次郎 | 一月三十日 | 高安 滋郎 |

協会支部よりのお知らせ

- | | | | |
|--------|-------|--------|-------|
| 一月十二日 | 青陽会 | 一月十三日 | 高橋 勝一 |
| 一月十四日 | 井上 義昭 | 一月十五日 | 高安 滋郎 |
| 一月十六日 | 観世 元昭 | 一月十七日 | 高安 滋郎 |
| 一月十八日 | 佐藤 秀雄 | 一月十九日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十日 | 塚本 秀武 | 一月二十一日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十一日 | 井上松次郎 | 一月二十二日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十二日 | 井上松次郎 | 一月二十三日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十三日 | 井上松次郎 | 一月二十四日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十四日 | 井上松次郎 | 一月二十五日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十五日 | 井上松次郎 | 一月二十六日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十六日 | 井上松次郎 | 一月二十七日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十七日 | 井上松次郎 | 一月二十八日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十八日 | 井上松次郎 | 一月二十九日 | 高安 滋郎 |
| 一月二十九日 | 井上松次郎 | 一月三十日 | 高安 滋郎 |

創業天保十三年

何と云つても
ます はん

お茶は升半

升半茶店

名物街 松坂屋(地階) 売店 地下街 大名古屋ビル 地下街 駅前 地下街 栄町 地下街 栄町